



2024年4月に開館した豊田市博物館は、豊田市の歴史、文化、産業、自然を包括的に扱う総合博物館です。隣接する豊田市美術館との調和や、最新の建築技術を取り入れた空間が大きな話題を呼んでいます。

1. 世界的建築家・坂茂氏による「21世紀の建築」

- デザインと素材：プリツカー賞受賞建築家の坂茂(ばん しげる)氏が設計。
- 豊田市産の木材をふんだんに使用した大屋根の格子梁が特徴的で、明るく開放的な空間が広がっています。

- 光の演出：エントランスの屋根には円形の穴が開いており、正午頃には床に豊田市の市章の影が映し出される仕掛けがあります。

2. 独創的な展示内容

- 集合展示「とよたモノがたり」：常設展示室の入り口にある、高さ約8メートル、幅約12メートルの巨大な展示棚です。豊田市の歴史や文化にまつわる「モノ」が格子状に並び、歩みを視覚的に体感できます。
- とよたの自然と人々の営み：ジオラマや映像技術を使い、原始～現代に至る豊田市の成り立ちを紹介。

3. 多彩な交流・体験空間

- えんにち空間：ガラスと木で作られた吹き抜けの広々とした交流スペースです。市民の活動紹介やワークショップなど、まさに「緑日」のような賑わいを生み出す場となっています。
- 屋外展示と自然体験：敷地内には「むかしの家(旧平岩家住宅)」、樫尾1号墳(古墳)、観察池、どんぐりの森などがあり、歴史や自然を屋外でも学ぶことができます。



企画展：「伊能忠敬 新しい地図の世界へ」(2026.1.31～3.29)

江戸時代の測量家、\*\*伊能忠敬(いのう ただたか)\*\*は、55歳という当時では隠居するような年齢から本格的な測量を開始し、約17年かけて日本全国を歩き、日本初の科学的実測図『大日本沿海輿地全図(だいにほんえんかいよちぜんず)』を完成させた人物です。パワフルな生き方に感服します！

50歳で家督を息子に譲り、江戸へ出た忠敬は、19歳も年下の幕府天文方・高橋至時に弟子入りしました。

- 究極の問い：当時の忠敬の最大の関心事は\*\*「地球の大きさ(緯度1度の長さ)」\*\*を知ることでした。
- 測量への挑戦：地球の大きさを知るためには、江戸から蝦夷地(北海道)までの距離を実測する必要があると考え、幕府に測量の許可を願い出しました。
- 測量の手法：「導線法」と呼ばれる、地点間の角度と距離を測る手法や、星を観測して緯度を測定する「天体観測」を組み合わせました。
- 驚異の歩み：全部で10回にわたる測量調査を行い、歩いた総距離は約4万km(地球1周分)に及んだと言われています。



# 温故知新：まち歩き あいち創業館の探訪



2026.2.17

## 1. 創立の意義と背景



デジタル技術を活用した展示により、あいちの創業者・企業家の歩みや産業の歴史を学べます。

STATION Ai の 2 階にある「あいち創業館」は、ただの歴史展示資料館ではなく、最新のデジタル技術を駆使して未来へ繋ぐ「起業家マインド」に火をつける体験型ミュージアムです。

最新のデジタル技術(生成 AI、プロジェクションマッピングなど)を駆使した、五感で楽しむ展示が特徴です。

愛知県はトヨタグループをはじめとする「ものづくり王国」ですが、その背景には数多くの情熱的な起業家(企業家)の挑戦がありました。

- ・ 起業家精神(アントレプレナーシップ)の育成: 単なる歴史展示ではなく、ここを訪れた子どもたちや若者が「自分も何かを興したい」という夢を持つきっかけを作ることを目的としています。
- ・ 過去と未来の交差点: 最新のスタートアップが集まる「STATION Ai」の中に置くことで、先人の知恵と現代の挑戦を繋ぐ場所としての役割を担っています。



## 「あいちの偉大なる創業者・企業家の歩みを知る」・「あいちの産業の歴史を知る」

1. 偉人のトイカケゾーン: 壁一面に刻まれた企業家たちの名言や「問いかけ」から始まります。自分が大切にしたい価値観を見つめ直す仕掛けです。
2. ダイナミックなガイダンスムービー: 壁一面に広がる大型スクリーンで、愛知の産業史をドラマチックな映像で体感できます。「木(綿織物・木工)」「水(醸造・海運)」「土(陶磁器)」からどのように現代の自動車や航空宇宙産業へと繋がっていったのか、視覚的に理解を深めることができます。
3. 産業のなりたち発見ウォール: 愛知の 3 つの源泉「木・水・土」から生まれた企業や製品を当時の産業風景と共に紹介されます。
4. 偉人との出会いゾーン: 大型のデジタルテーブルがあり、タッチ操作で豊田佐吉氏(トヨタ)や盛田昭夫氏(ソニー)など、愛知ゆかりの創業者・企業家の名言や理念、エピソードや製品の詳細を深く掘り下げることができます。教育・流通・伝統産業を支えた人物まで、多岐にわたる「あいちの挑戦者」に出会えます。
5. 探求・交流ゾーン(おすすめ!): 生成 AI を活用した体験コンテンツがあります。自分の考えを入力すると、自分に近いタイプの偉人を診断してくれたり、関連する書籍をライブラリーから紹介してくれたりします。



2026.1.20



刈谷市にある依佐美(よさみ)送信所は、かつて日本が世界に誇った巨大な無線通信施設です。1929年(昭和4年)に完成し、当時は「東洋一」の高さを誇る鉄塔が並ぶ、日本の国際通信の拠点でした。

同送信所は、\*\*「日本の情報を、他国の通信回線を介さず、日本の手で世界に届ける」\*\*という悲願を達成するための象徴で、完成した際、日本はついに自らの手で、地球の裏側にあるワルシャワやベルリン、パリ、ロンドンといった主要都市と直接通信する力を手に入れました。

その後、技術の進歩で「短波」が主流になると予備機となりますが、その「長波」の安定性が評価され、戦中・戦後は潜水艦通信という特殊な役割を担いましたが、1997年に鉄塔は解体されました。現在はその跡地が「フローラルガーデンよさみ」として整備され、依佐美送信所記念館でその歴史に触れることができます。

### 依佐美(よさみ)送信所と依佐美送信所記念館

#### 1. 歴史的意義と「世界最大級」の規模

依佐美送信所は、対ヨーロッパ向けの無線通信を目的に建設されました。

- **東洋一の鉄塔:** 高さ250mの鉄塔が8基も並んでいました。これは1958年に東京タワーが完成するまで、日本で最も高い建造物でした。
- **長波通信の拠点:** 当時、地球の裏側まで電波を届けるには「長波」という波長の長い電波が必要でした。依佐美はその巨大な設備によって、日本で初めてヨーロッパとの直接通信を可能にしました。
- **歴史の転換点:** 太平洋戦争中には日本海軍に接收され、潜水艦への指令送信に使われました。真珠湾攻撃の際の暗号文\*\*「ニイタカヤマンボレ」\*\*を潜水艦へ中継した場所の一つとしても知られています。

#### 2. 戦後から返還、そして保存へ

戦後は米海軍に接收され、1993年まで対潜水艦用として運用されていました。

- **返還と解体:** 1994年に日本へ返還。老朽化と役割の終了により1997年に鉄塔は解体されましたが、市民の強い要望により一部が保存されました。
- **世界的な評価:** 2009年に、電気・電子分野の歴史的偉業を称える\*\*「IEEE マイルストーン」\*\*に認定されました。その他、機械遺産や未来技術遺産にも選ばれています。
- 記念館は、かつての送信所の本館事務所を再現した建物で、内部には当時の最先端技術の結晶である巨大な機械類が、まるで今も動いているかのような状態で美しく保存・展示されています。

依佐美送信所は、「対ヨーロッパ通信の開拓者」として始まり、「戦争の重要なメッセンジャー」となり、戦後は「米軍の通信拠点」\*\*として冷戦期を支え続けました。

記念館に行くと、こうした「時代の荒波」を乗り越えてきた巨大な機械類が、今は静かに余生を過ごしているのを見ることができます。

